

各関係機関団体の長 }
各病虫害防除員 } 殿

福岡県病虫害防除所長

平成24年度病虫害発生予報第5号（8月）について

このことについて、病虫害発生予報第5号を発表したので送付します。

予報第5号

8月における主な病虫害の発生動向は、次のように予想されます。

主な病虫害の発生予報概要

作物名	病虫害名	発生量 (現況)	発生量 (8月の発生予報)	
		平年比	平年比	前年比
水稲	いもち病 (葉いもち・穂いもち)	やや多	やや多	やや少
	紋枯病	少	少	並
	セジロウンカ	多	多	多
	トビイロウンカ	並	並	多
	コブノメイガ	少	少	並
	斑点米カメムシ類	少	少	並
大豆	ハスモンヨトウ	少	少	少
かんきつ	黒点病	やや少	やや少	並
	ミカンハダニ	やや少	並	並
なし	ナシヒメシンクイ	やや少	やや少	並
ぶどう	べと病	やや少	やや少	やや少
かき	炭疽病	並	並	並
	フジコナカイガラムシ	やや少	並	並
	ハマキムシ	並	並	並
果樹共通	カメムシ類 (チャバネアオカメムシ)	多 (前年比)	少 (平成14年比)	多
茶	炭疽病	多	やや多	やや多
	輪斑病	やや少	やや少	やや少
	チャノコカクモンハマキ	少	やや少	やや少
	チャノホソガ	やや少	やや少	並
	チャノミドリヒメヨコバイ	並	やや多	やや多
	カンザワハダニ	並	やや多	多
	チャノキイロアザミウマ	やや少	並	やや多
イチゴ (育苗期)	うどんこ病	やや多	やや多	やや多
	炭疽病	並	多	多
	ハダニ類	並	やや多	多

注：果樹共通・カメムシ類の発生量の平年比は、現況については前年比、8月の発生予報については、発生状況が類似している平成14年比としている。

葉いもちの発生に注意しましょう！

京築・北九州地域やその他一部地域において、葉いもちの発生が多い傾向にあります。出穂期に葉いもちが発生していると、穂いもちの発生源となるので、本田での発生状況を十分把握し、適切な防除に努めましょう。



葉いもち



穂首いもち

果樹園の見回りとチャバネアオカメムシの防除を徹底しましょう！

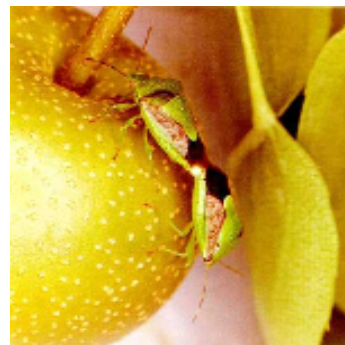
7月に入りチャバネアオカメムシの予察灯での誘殺数が急増しており、一部のナシやカキで被害が確認されています。

新世代成虫の発生量は、類似年の平成14年よりは少なく、平成22年並と考えられ、果樹園への飛来は、早いところで8月中旬頃から見られると予想されます。

本年は発生量の地域差が大きいので、園内外での発生状況の把握に努め、飛来が認められた場合は薬剤防除を徹底して下さい。



カキの被害果



ナシ果実上の成虫

<予想される向こう1か月の天候（平成24年7月28日～8月27日）>

平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年より少なく、日照時間は平年より多いでしょう。

週別の気温は、1週目と2週目は平年並か高いでしょう。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）

要素	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気温	20	40	40
降水量	50	30	20
日照時間	20	30	50

（福岡管区气象台 平成24年7月27日発表抜粋）

作物別発生予報

注①：この予報は病害虫防除所の現地調査結果に基づき、情報作成会議を経て作成しています。

注②：予報の根拠の末尾の（ ）書きは、（+）は発生を助長する要因、（-）は発生を抑制する要因、（±）は発生の助長及び抑制に影響の少ない要因であることを示します。

【普通作物—水稻】

普通期水稻

1 いもち病（葉いもち・穂いもち）

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった（+）。

*発生状況は、地域やほ場による差が大きく、発生株率

100%の多発ほ場が、一部で認められる。

発病株率 7.4%（平年 5.8%、前年 11.3%）

発生ほ場率 24.4%（平年 17.9%、前年 29.5%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年より少ないとされている（-）。

(3) 防除上の注意

ア 地域やほ場によって発生状況が大きく異なるため、必ず本田での発生状況を確認する。

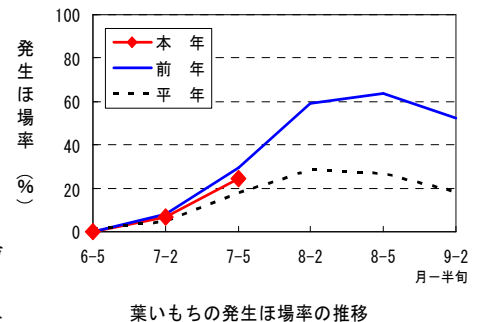
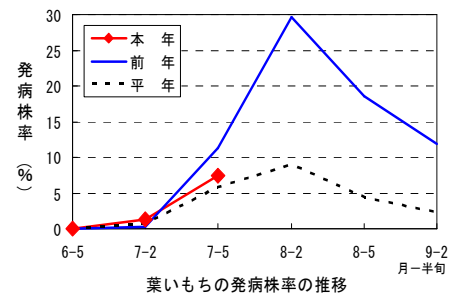
育苗期に本病が発生した地域では、特に注意する。

イ 本病原菌は孢子形成量が非常に多く、病斑数が少ない場合でも大量の孢子が飛散する。このため、葉いもちが発生しているほ場では、薬剤防除を徹底するとともに、適切な肥培管理に努める。

ウ 穂いもちに対する薬剤防除を実施する場合、剤型によって散布時期が異なるので注意する。粉剤は出穂期前、粒剤は出穂期2週間前に処理する。

エ 粒剤を施用する場合は、散布後7日間止水する。

オ 薬剤は「平成24年度普通作病害虫・雑草防除の手引き」を参照し農薬使用基準を遵守する（以下の病害虫についても同様）。



2 紋枯病

(1) 予報の内容

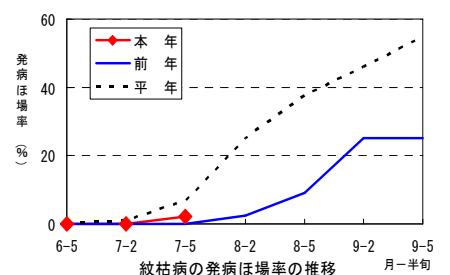
発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（-）。

発病株率 0.1%（平年 0.9%、前年 0%）

発生ほ場率 2.2%（平年 6.7%、前年 0%）



イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年より少ないとされている(±)。

(3) 防除上の注意

- ア 出穂期以降に、上位葉へ病斑が進展するのを防ぐため、発生ほ場では防除を実施する。粉剤は出穂期10～14日前の防除効果が高い。
- イ 粒剤は薬剤によって使用時期(収穫前日数)が異なるので、使用基準を確認する。
- ウ 粒剤を施用する場合は、散布後7日間止水する。

3 セジロウんカ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多

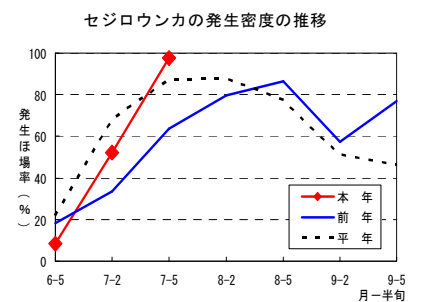
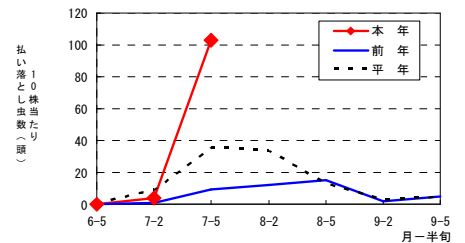
(2) 予報の根拠

- ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった(+)。
10株当たり払い落とし成幼虫数 103.1頭
(平年 35.7頭、前年 9.3頭)
発生ほ場率 97.8% (平年 87.2%、前年 63.6%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年より少ないとされている(-)。

(3) 防除上の注意

- ア 飛来量は地域による差が大きく、主要飛来の時期も地域により異なる場合があるため、ほ場における発生状況の把握に努める。
- イ 一昨年、本種によって媒介されるイネ南方黒すじ萎縮病(仮称)の発生が確認された(平成22年度特殊報第3号参照)。飼料用水稻では本種が増殖しやすいため、発生状況に注意する。防除を実施する場合は、「稲発酵飼料生産・給与マニュアル」(稲発酵粗飼料推進協議会等編)、「多収米栽培マニュアル」(農林水産省)等に沿って行う。



4 トビイロウんカ

(1) 予報の内容

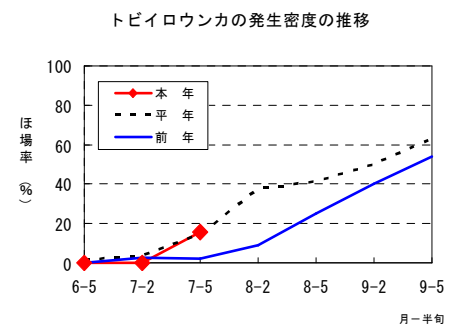
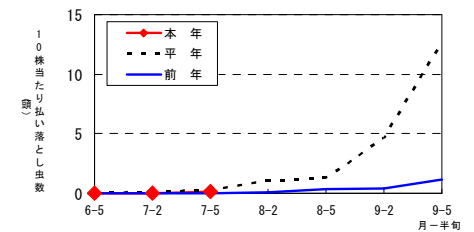
発生量：平年並、前年より多

(2) 予報の根拠

- ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。
10株当たり成幼虫数 0.16頭 (平年 0.26頭、前年 0.02頭)
発生ほ場率 15.6% (平年 14.1%、前年 2.3%)
- イ 県下5地点の予察灯による6月1半旬～7月4半旬までの合計誘殺虫数は、14頭(平年 24頭、前年 2頭)と平年より少なかった(-)。
- ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年か高く、降水量は平年より少ないとされている(±)。

(3) 防除上の注意

- ア 飛来量は地域による差が大きく、主要飛来の時期も地域により異なる場合があるため、ほ場における発生状況の把握に努める。
- イ 発生初期には低密度でも急激に増加するため、発生パターン図(平成24年度技術情報第1号参照)を参考に、必ずほ場での発生状況を把握し、適期(若齢幼虫発生期)に防除を行う。



※要防除水準

飛来後第一世代	100株当たり	20頭以上
飛来後第二世代	100株当たり	100頭以上
9月末	100株当たり	1,000頭以上

ウ 育苗箱施薬剤が施用された場合でも、移植後1か月以上経過した水田においてはウンカ類が増殖しやすいので、十分注意する。

エ 本種は株元に生息しているため、防除薬剤が株元に十分かかるように丁寧に散布する。
 オ 無人ヘリコプターによる防除を実施する場合は、気温が高くなる前の早朝や気温が下がった夕方に実施する。気温が高い時間帯に実施すると、薬剤の種類によってはイネの株元に到達する前に蒸発して防除効果が著しく低下することがある。

5 コブノメイガ

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(一)。

食害株率 0.5% (平年 7.1%、前年 0%)

発生ほ場率 20.0% (平年 49.4%、前年 0%)

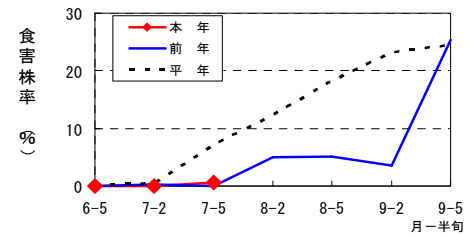
30㎡当たり払出し成虫数 0.1頭 (平年 0.4頭、前年 0.2頭)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年より少ないとされている(±)。

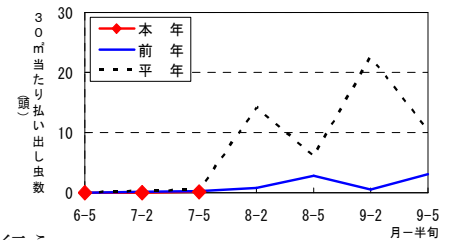
(3) 防除上の注意

ア コブノメイガの防除適期は、発蛾最盛期から1週間後である。

イ 本種はセジロウンカと同時期に飛来していると考えられるので、発生パターン図(平成24年度技術情報第1号参照)を参考に防除を行う。



コブノメイガの食害株率の推移



コブノメイガ発生密度の推移

6 斑点米カメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 県下5地点の予察灯における、7月1半旬～5半旬までのアカスジカスミカメムシ、ミナミアオカメムシ、及び主要3種カメムシ誘殺虫数は平年(過去7か年平均)より少なかった(一)。

アカスジカスミカメムシ

372頭(過去7か年平均 913頭、前年 1,074頭)

ミナミアオカメムシ

6頭(過去7か年平均 38.4頭、前年 1頭)

主要3種カメムシ(ケホカメムシ、ホリカメムシ、シホカメムシ)

6頭(過去7か年平均 13.6頭、前年 3頭)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年より少ないとされている(+)

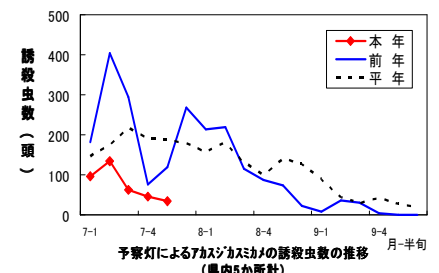
(3) 防除上の注意

ア 畦畔や休耕田などの草刈を徹底し、出穂期2週間前までに終了する。

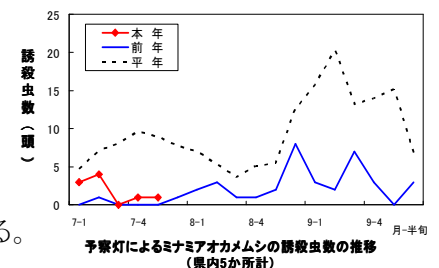
イ 防除適期は、穂揃期及びその7～10日後である。

ウ 出穂期の早いほ場では集中的に加害される恐れがあるため、発生状況に注意する。

エ ミナミアオカメムシに対しては、シラフルオフェン剤の防除効果が低いので、効果の高い薬剤を使用する。



予察灯によるアカスジカスミカメムシの誘殺虫数の推移(県内5か所計)



予察灯によるミナミアオカメムシの誘殺虫数の推移(県内5か所計)

【普通作物：大豆】

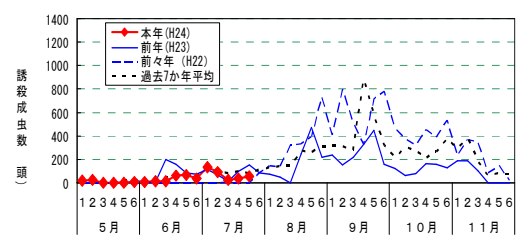
1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より少

(2) 予報の根拠

ア 7月1半旬～5半旬のフェロモントラップにおける誘殺虫数は、平年(過去2～7か年平均)より少なかった(一)。



第1図 フェロモントラップによるハスモンヨトウの誘殺成虫数の推移(筑紫野市)

月-半旬

筑紫野市 343 頭 (過去 7 年平均 483 頭、前年 443 頭)

柳川市 553 頭 (過去 3 年平均 1,588 頭、前年 2,444 頭)

行橋市 54 頭 (過去 2 年平均 553 頭、前年 225 頭)

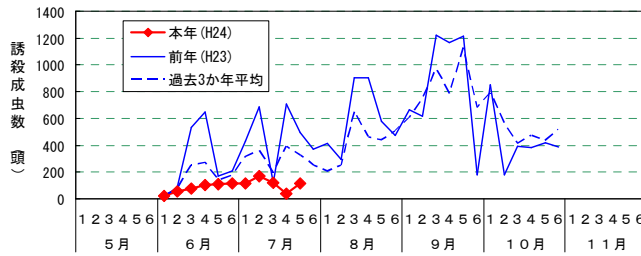
イ 向こう 1 か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年より少ないとされている (+)。

(3) 防除上の注意

ア 分散前の若齢幼虫が群棲している白変葉は、見つけ次第除去する。

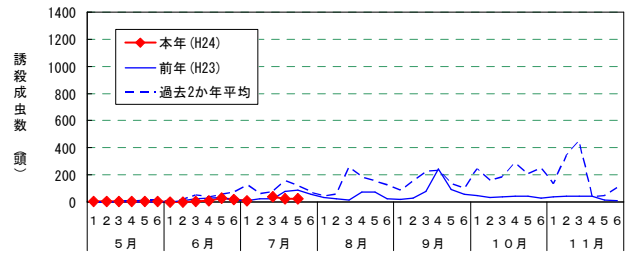
イ 薬剤散布は、防除効果が高い若齢幼虫期に実施する。

ウ 防除適期はフェロモントラップの誘殺ピークから 10 日目頃であるが、地域によって誘殺数に差があるため、ほ場で若齢幼虫の食害により生じる白変葉の発生状況を、必ず確認する。



第2図 フェロモントラップによるハモシジメ誘殺成虫数の推移 (柳川市)
※ 柳川市での調査期間は6月～10月

月-半旬



第3図 フェロモントラップによるハモシジメ誘殺成虫数の推移 (行橋市)

月-半旬

【果樹：かんきつ】

1 黒点病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった (-)。

発病果率 0.6% (平年 1.4%、前年 0.5%)

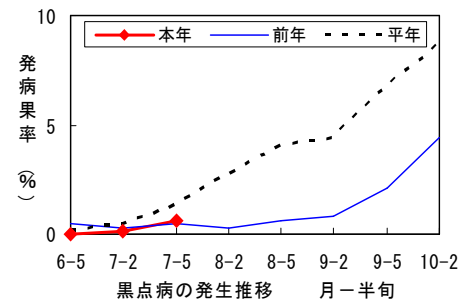
発生ほ場率 41.7% (平年 35.3%、前年 27.3%)

イ 向こう 1 か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年より少ないとされている (±)。

(3) 防除上の注意

ア 伝染源となる枯れ枝は除去し、園外に持ち出して処分する。

イ 前回の散布から 1 か月後、又は積算降水量 250mm を目安に防除を実施する。



2 ミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった (-)。

寄生葉率 5.6% (平年 15.0%、前年 16.8%)

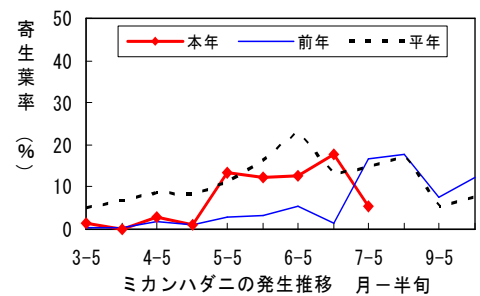
発生ほ場率 50.0% (平年 64.7%、前年 81.8%)

イ 向こう 1 か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年より少ないとされている (+)。

(3) 防除上の注意

ア 薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。

イ 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



【果樹：なし】

1 ナシヒメシンクイ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月1半旬～4半旬までのフェロモントラップの誘殺数は、平年よりやや少なかった（－）。

県内3か所の平均 20 頭（平年 92 頭、前年 47 頭）

イ 7月5半旬調査の結果、被害果の発生量は平年よりやや少なかった（－）。

被害果率 0.2%（平年 0.4%、前年 0%）

ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年より少ないとされている（＋）。

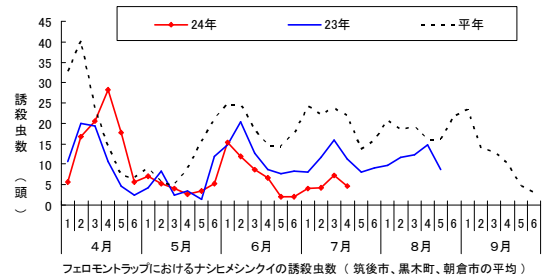
(3) 防除上の注意

ア 8月上～中旬頃の発蛾最盛期直後に防除を行う。

防除後も成虫が多く見られる場合は、7～10日後に追加防除を行う。

イ 幼虫は主に果頂部から食入加害するので、防除に当たっては、果実に薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。

ウ 収穫期を迎える品種は、薬剤の選定など農薬使用基準を遵守する。



【果樹：ぶどう】

1 ベと病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－）。

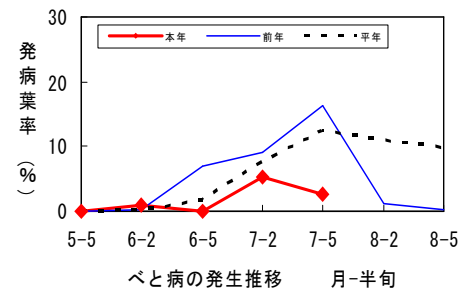
発病葉率 2.7%（平年 12.5%、前年 16.4%）

発生ほ場率 25.0%（平年 68.6%、前年 62.5%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年より少ないとされている（－）。

(3) 防除上の注意

ア ボルドー液は降雨直後や散布直後の降雨により、薬害が発生する可能性があるため注意する。



【果樹：かき】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

発病枝率 0.5%（平年 0.6%、前年 0.6%）

発生ほ場率 35.7%（平年 23.7%、前年 21.4%）

発病果率 0.4%（平年 0.4%、前年 0.6%）

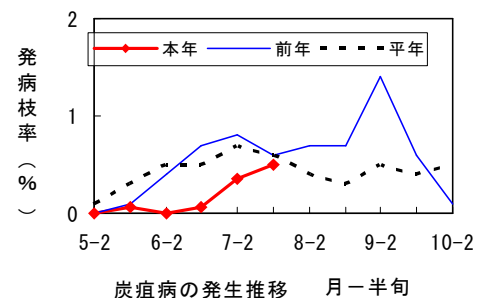
発生ほ場率 35.7%（平年 19.1%、前年 21.4%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年より少ないとされている（±）。

(3) 防除上の注意

ア 伝染源となる罹病枝及び罹病果は除去する。

イ 台風等の強風雨が予想される場合や、発病が多い園、病気に弱い品種（早秋）では、薬剤防除を徹底する。



2 フジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量： 平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(－)。

寄生果率 4.5% (平年 9.2%、前年 8.4%)

発生ほ場率 71.4% (平年 80.2%、前年 69.2%)

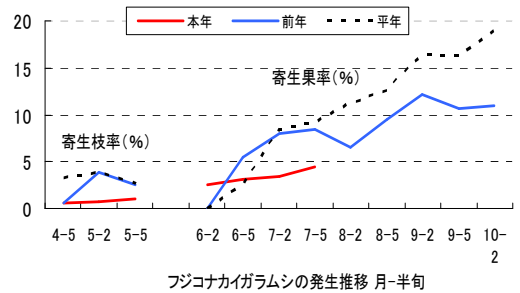
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年より少ないとされている(+)。

(3) 防除上の注意

ア 薬剤防除の効果が最も高いのは若齢幼虫期であるが、第2世代以降は齢期が乱れているので、園内をよく観察して適期防除を実施する。

イ 防除の際は、ヘタの下や葉と重なった果実表面に、薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。

ウ 合成ピレスロイド系剤は、天敵類に悪影響を及ぼすので、カメムシが飛来している場合を除き使用を控える。



3 ハマキムシ類

(1) 予報の内容

発生量： 平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

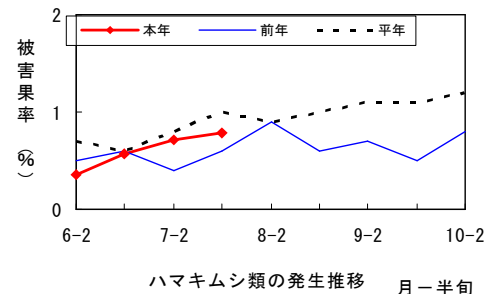
被害果率 0.8% (平年 1.0%、前年 0.6%)

発生ほ場率 35.7% (平年 41.2%、前年 28.6%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年より少ないとされている(+)。

(3) 防除上の注意

防除の際は、ヘタの下や葉と重なった果実表面に、薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。



【果樹：共通】

1 カメムシ類 (チャバネアオカメムシ)

(1) 予報の内容

新世代成虫発生量： 前年より多、前々年並 (平成14年<類似年>より少)

<参考：チャバネアオカメムシの発生状況>

	本年	前年	前々年	平成14年 <類似年>
越冬量(頭/m ²)	3.6	0.7	2.0	4.6
ヒキ球果着生量	少	中	やや少	中
発生型	—	後期	後期	前期

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬における県下22か所のヒノキ球果のビーティング調査の結果、チャバネアオカメムシの1地点当たりの寄生虫数は、成虫が前年・前々年より多く、平成14年より少なかった。

また、幼虫は前年より多く、前々年並で、平成14年より少なかった(前年比：+)。

表 ヒノキ球果の口針鞘数及びヒノキのビーティング調査によるカメムシ類の虫数

調査場所	口針鞘数 (本)	虫数(頭)		齢別構成割合 (%)					
		成虫	幼虫	成虫	1令	2令	幼虫 3令	4令	5令
本所 13か所	7.0	6.0	6.5	47.9	18.4	19.6	12.3	0.0	1.8
筑後支所 6か所	2.4	3.7	5.3	40.7	14.8	25.9	11.1	3.7	3.7
行橋支所 6か所	2.8	3.0	1.3	69.2	15.4	15.4	0.0	0.0	0.0
平均 25ヶ所	4.9	4.7	5.0	48.6	17.3	20.6	10.7	0.8	2.1
前年 (H23)	1.0	1.1	3.0	27.5	3.9	10.8	30.4	14.7	12.7
前々年 (H22)	3.9	1.9	6.0	23.8	21.3	12.5	21.3	11.3	10.0
類似年 (H14)	9.5	5.5	10.8	33.4	7.1	24.0	19.8	6.8	8.8

注1) 口針鞘数調査は1地点当たり20球果、口針鞘数は20球果の平均である。

注2) ビーティング調査は、1地点5枝、1枝当たり5箇のたたき落として、その合計虫数である。

注3) チャバネアオカメムシの卵から次世代の成虫になるまでの期間は、夏期の温度では約30～40日である。

イ 7月1半旬～4半旬までの予察灯でのチャバネアオカメムシ誘殺虫数は、前年・前々年より多く、平成14年より少なかった。(前年比: +)

<調査地点: 筑紫野市>

本年 4,367頭 (前年 77頭、前々年 243頭、平成14年 16,095頭)

<調査地点: 飯塚市>

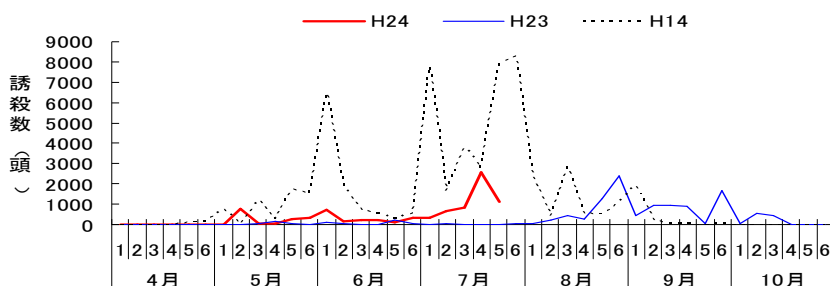
本年 603頭 (前年 38頭、前々年 10頭、平成14年 3,366頭)

<調査地点: 朝倉市>

本年 238頭 (前年 16頭、前々年 71頭、平成14年 345頭)

<調査地点: 八女市黒木町>

本年 309頭 (前年 24頭、前々年 159頭、平成14年 972頭)



チャバネアオカメムシの予察灯における誘殺数(筑紫野市)

ウ 7月1半旬～4半旬までのフェロモントラップでのチャバネアオカメムシ誘殺虫数は、前年・前々年より多く、平成14年より少なかった。(前年比: +)

<調査地点: 筑紫野市吉木>

本年 7,388頭 (前年 196頭、前々年 492頭、平成14年 63,562頭)

エ 7月5半旬調査の結果、被害果は前年・前々年より多く、平成14年より少なかった。(前年比: +)

なしの被害果率 0.3% (前年0%、前々年0%、平成14年0.8%)

かきの被害果率 0.1% (前年0%、前々年0%、平成14年2.7%)

オ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年より少ないとされている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 7月5半旬のヒノキ球果の口針鞘数調査結果から、新世代成虫がヒノキから離脱し果樹園へ多く飛来する時期は、本所管内では8月18日頃、筑後・行橋支所管内では9月4～5日頃と予想される。また、早い地域では盆前～盆頃と予想される。

イ 本年は、発生量の地域差が大きいと考えられるので、果樹園内外での発生状況の把握と、園内の見回りを強化し、飛来や果実の落果等の異常を認めたら、薬剤防除を行う。

ウ 樹種によって使用できる薬剤が異なるので、使用基準・使用回数等を遵守する。

【果樹：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (8月の発生予報)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
ナシ ハダニ類	多	多	多	・多発生すると防除が困難になるので、発生 の少ない時期の防除を徹底する。
カキ うどんこ病	並	並	並	・葉裏にかかるよう丁寧に散布する。
カキノヘタムシガ	並	並	並	・発生が多い園では、8月上～中旬の防除を 徹底する。

【茶】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった(+)。

発病葉数 7.6葉 (平年1.3葉、前年0.2葉)

発生ほ場率 50.0% (平年27.8%、前年22.2%)

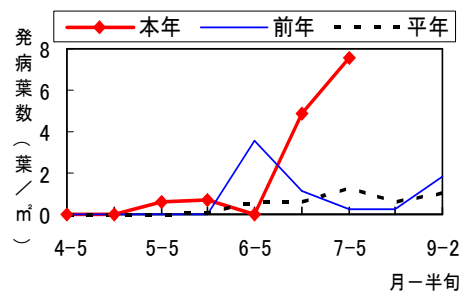
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年より少ないとされている(-)。

(3) 防除上の注意

ア 摘採・整枝後等の残葉での発生に注意し、萌芽から1葉期までに防除を炭疽病の発生推移特に、最終摘採後の新芽(秋芽)に対する防除を徹底する。

イ 雨滴により胞子が飛散伝搬するので、降雨前の防除効果が高い。

ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



2 輪斑病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(-)。

発病葉数 0.06葉 (平年0.2葉、前年0.5葉)

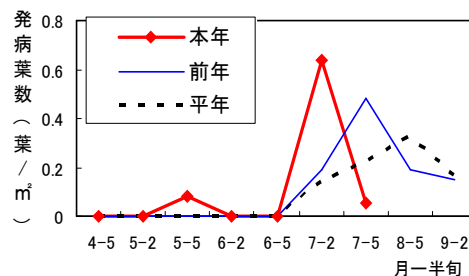
発生ほ場率 8.3% (平年11.4%、前年22.2%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年より少ないとされている(-)。

(3) 防除上の注意

ア 葉や茎の傷口から病原菌が侵入感染するため、三番茶摘採又は刈り落とし当日か翌日に、防除を行う。

イ 台風等の強い風雨の後では、葉や茎の傷口の増加によって、感染が急速に拡大するので、降雨後速やかに防除を行う。



輪斑病の発生推移

3 チャノコカクモンハマキ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

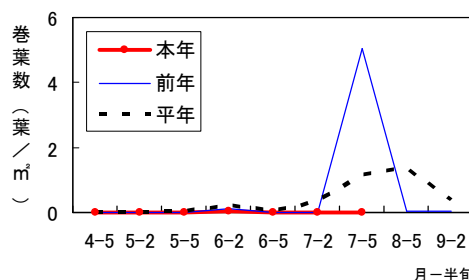
(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(-)。

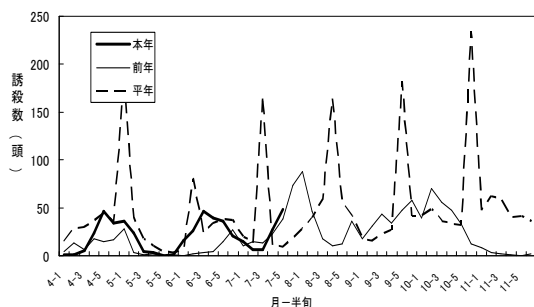
被害葉数 0葉 (平年1.2葉、前年5.0葉)

発生ほ場率 0% (平年36.2%、前年77.8%)

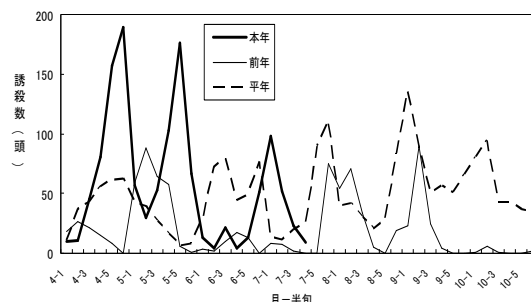
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年より少ないとされている(±)。



チャノコカクモンハマキの発生推移



フェロモントラップによるチャノコカクモンハマキの誘殺数(後半市)



フェロモントラップによるチャノコカクモンハマキの誘殺数(後半市)

(3) 防除上の注意

- ア 第2世代成虫の発蛾最盛期は、7月下旬から8月上旬頃と予想されるので、ほ場での成虫の発生に注意し、成虫が最も多いときから7日後を目安に、防除を行う。
- イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が見られたら、直ちに防除を行う。

4 チャノホソガ

(1) 予報の内容

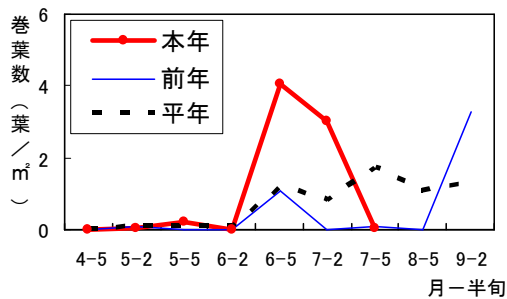
発生量： 平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

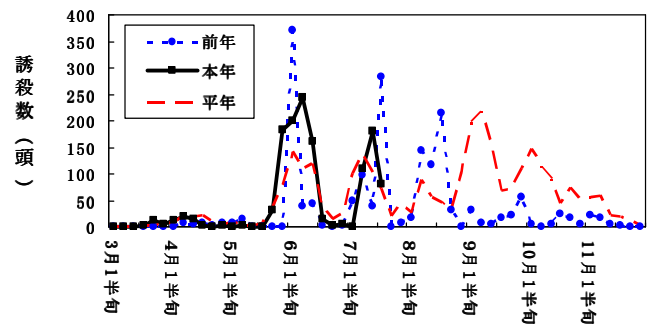
- ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（-）。
被害葉数 0.06葉（平年 1.7葉、前年 0.07葉）
発生ほ場率 16.7%（平年 27.3%、前年 11.1%）
- イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年より少ないとされている（±）。

(3) 防除上の注意

- ア 第2世代成虫の発蛾最盛期は、8月上～中旬頃と予想されるので、ほ場での成虫の発生に注意し、成虫が最も多いときから7日後を目安に、防除を行う。
- イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が見られたら、直ちに防除を行う。



チャノホソガの発生推移



フェロモントラップによるチャノホソガの誘殺数(八女市)

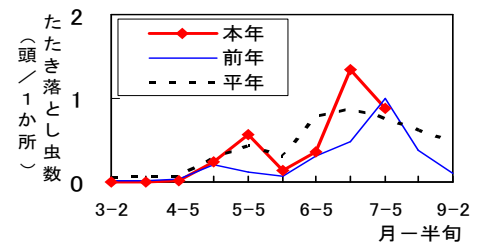
5 チャノミドリヒメコバイ

(1) 予報の内容

発生量： 平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

- ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。
たたき落とし虫数 0.9頭（平年 0.8頭、前年 1.0頭）
発生ほ場率 58.3%（平年 49.7%、前年 33.3%）
- イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年より少ないとされている（+）。



チャノミドリヒメコバイの発生推移

(3) 防除上の注意

- ア たたき落とし（B5版上）で、4頭以上発生している場合は防除を行う。
- イ 新芽の萌芽から開葉期を、重点に防除する。
- ウ 効果の高い薬剤が少ないので、多発する前に防除する。

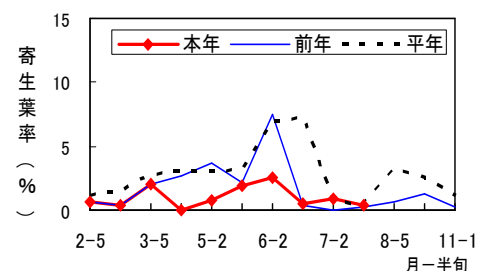
6 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

発生量： 平年よりやや多・前年より多

(2) 予報の根拠

- ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。
寄生葉率 0.3%（平年 0.5%、前年 0.2%）
50葉当たり虫数 0.2頭（平年 0.7頭、前年 0.1頭）
発生ほ場率 16.7%（平年 10.3%、前年 10.0%）



カンザワハダニの発生推移

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年より少ないとされている(+)。

(3) 防除上の注意

- ア 発生状況をよく観察し、寄生葉率が2%以上の場合は防除を行う。
- イ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

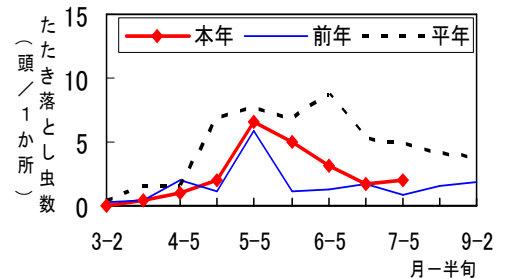
7 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量：平年並・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

- ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(-)。
たたき落とし虫数 2.1頭(平年 4.9頭、前年 0.9頭)
発生ほ場率 75.0%(平年 81.0%、前年 58.3%)
- イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年より少ないとされている(+)



チャノキイロアザミウマの発生推移

(3) 防除上の注意

- ア たたき落とし(B5版上)で、10頭以上発生している場合は防除を行う。
- イ 新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。

【野菜：イチゴ】

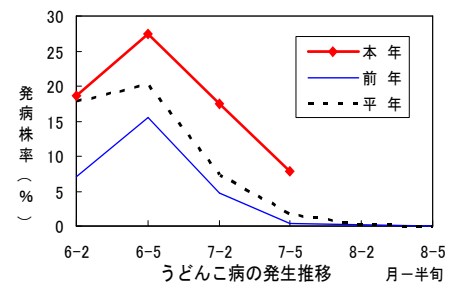
1 うどんこ病(育苗期)

(1) 予報の内容

発生量：平年(過去8か年平均)・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

- ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(+)
発病株率 7.8%(平年 1.8%、前年 0.5%)
- イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年より少ないとされている(-)



(3) 防除上注意すべき事項

- ア 苗の間隔を空け通風を図る。
- イ 伝染源である罹病葉や古葉は、出来るだけ除去し、ほ場外に持ち出し処分する。
- ウ 高温期は病斑が消滅するが、潜在感染株は本ぽで発病するので、定期的な予防散布を実施する。

2 炭疽病(育苗期)

(1) 予報の内容

発生量：平年(過去8か年平均)より多、前年より多

* 予報の詳細については、平成24年7月31日「24病防第763号 注意報第4号」参照。

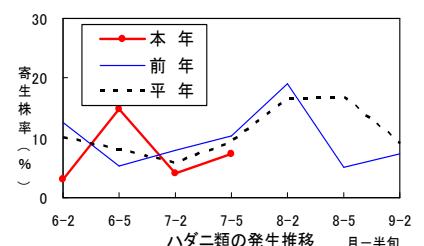
3 ハダニ類(育苗期)

(1) 予報の内容

発生量：平年(過去8か年平均)よりやや多、前年より多

(2) 予報の根拠

- ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。
寄生株率 7.3%(平年 9.4%、前年 10.4%)
- イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年より少ないとされている(+)

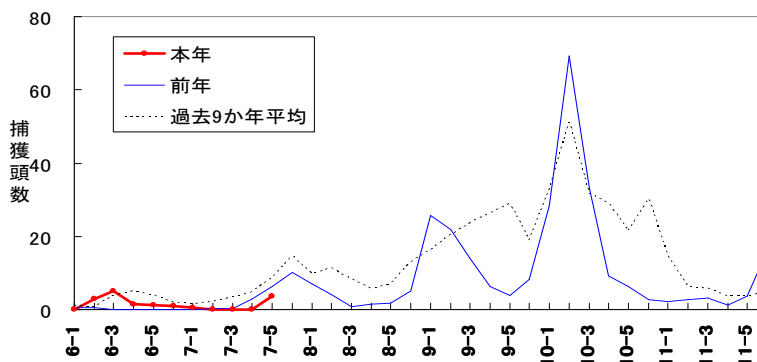


(3) 防除上注意すべき事項

- ア 多発後は防除が困難になるので、発生初期の防除を徹底する。
- イ 摘葉した葉はほ場内に放置せず、ビニル袋等に入れ、密封し処分する。
- ウ 夜冷短日や低温暗黒などの処理を行う場合は、入庫前に防除を行い、ハダニを持ち込まないようにする。
- エ 本ほで天敵を利用する場合、育苗後半は天敵類への影響が長い有機リン系、カーバメイト系、合成ピレスロイド系、ピラゾール系の薬剤は使用しない。
- オ ほ場内や周辺の除草を徹底する。

【野菜：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (8月の発生予報)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
アスパラガス 斑点性病害	並	並	やや少	<ul style="list-style-type: none"> ・過繁茂にならないように摘葉を行い、ほ場内の通風を良くする。 ・多発生後は防除が困難になるので、発生状況に注意し、防除を徹底する。 ・黄色蛍光灯を設置しているほ場では、日没1時間前～日の出後1時間、点灯する。
アザミウマ類	並	やや多	並	
チョウ目 (ハモンヨトウ・材かゝコガ)	並	やや多	やや多	
野菜共通 コナジラミ類	少	並	やや多	<ul style="list-style-type: none"> ・野外（筑後市）に設置したトマト苗トラップによる捕獲数は、平年より少なかった。 ・今後の発生状況については、病害虫防除所のホームページを参照のこと。



トマト苗トラップでのタバココナジラミ類捕獲頭数の推移 (筑後市) 月一半月

福岡県病害虫防除所では、病害虫の発生状況と防除について、ホームページでお知らせしています。

ホームページ <http://www.jppn.ne.jp/fukuoka/>
 電子メール byougaihuboujyo@pref.fukuoka.lg.jp

農薬の危害防止に努めましょう ～6月から8月は「農薬安全使用運動」期間です～

福岡県では農薬の使用機会が多い6月から8月を「農薬安全使用運動」の実施期間として定め、農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮等について周知しています。

また、農薬による事故などを防止することを目的とした安全使用講習会の開催や、啓発チラシの配布等に、関係機関・団体が一体となって取り組みます。

散布者の安全はもちろん、人畜、隣接作物、河川等への配慮について、ご指導をお願いします。

なお、平成23年2月4日付けの「農林水産省消費安全局長、環境省水・大気環境局長通知」により、**農薬として「ツバキ油粕」等を使用することは禁止されております**ので、併せてご指導よろしく申し上げます。

農薬安全使用運動重点啓発事項

- ① 農薬ラベル確認の徹底
(適用作物・使用量や濃度・使用時期・総使用回数)
- ② 散布時には近隣作物や住宅街への飛散防止を徹底
 - ・風、散布方向、散布時間、散布圧に留意
 - ・飛散しにくい農薬（剤型）や、飛散が少ないドリフトレスノズルを使用
 - ・散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意
- ③ 水田除草剤や本田粒剤は、使用後7日間の止水を遵守
 - ・落水・かけ流しをしない。
- ④ 散布後は必ず散布器具（タンク、ホース等）を3回洗浄
- ⑤ 防除履歴の正確な記帳
 - ・薬剤散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、散布年月日、薬剤名、使用濃度、散布量等を正確に記帳